
はくぎんのよげんしゃとしゅうえんのまほうつかい

坂上ジュンヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はくぎんのよげんしゃとしゅうえんのまほうつかい

【Nコード】

N1194P

【作者名】

坂上ジュンヤ

【あらすじ】

予言者と少女と魔法使いの青年の話を、
童話調でお届けします。

…予知の夢をみる少女と、彼女を支える魔法使いの青年。
彼らの樂園はあまりにも脆く…。…

バッドエンドに転がっていくと思われます。
ご了承ください。

（前） よげんしゃのしょうじょ

むかしむかし、ある深い森の奥に一人の予言者の少女が住んでいました。

名前はシャルロット。

絹糸の様な白い髪が美しい小柄な少女です。

少女は森の奥の小さな小屋で、織物を織ったり、ジャムを作ったりして、静かに暮らしていました。

予言の力というものは、とても珍しいものです。

その力を商売に使えば、

街の真ん中でふんぞり返るくらい楽な暮らしも出来ましたが、少女はただゆっくりと、森の中で暮らしているのです。

ある時、少女が暖炉の前でゆっくりと編み物をしていると、入り口の扉が、こんこん、と優しく叩かれました。

少女が出迎えるように扉を開くと、

寒風が部屋へ流れ込みます。

扉の前には、少し肩をすくめた一人の青年が立っていました。

「いらっしやい、メルクマール」

メルクマールと呼ばれた青年は少し笑うと、

寒風に背中を押されるように小屋の中に転がり込みました。

少女が扉を閉めると、部屋の中は暖炉によって暖められた空気に満たされました。

青年は抱えていた大きな紙袋を机の上に置くと、

グルグル巻きにしていたマフラーを解いて息を吐きました。

栗色の癖っ毛が少し幼く見える青年は、街の外れで暮らしている魔法使いです。

青年とは言え、彼は才能がとてもありましたので、

高位の魔法だってたくさん使えます。

けれど青年も、薬草を調合したり、時に治療用の魔法を使うくらいで、特に目立つこともなく、街の外れで静かに暮らしているのです。

予言者の少女と魔法使いの青年は、ちいさい頃からの仲良しでした。だから今も、青年は2、3日おきに色々と持って少女のお家を訪れるのでした。

「お外は寒い？」

少女が暖炉に薪をくべながら問うと、青年は人の良さそうに笑って、「いや、街を出た時はそうでもなかったんだけど、森に入ったら急に荒れてきたんだ」と返しました。

青年の頬と鼻は、まだ寒さのために真っ赤に染まっています。

少女は少し火の強まった暖炉を見届けると、

青年のマフラーをコート掛けにひっかけました。

「今年の冬も、厳しくなりそうよ」

「それ、予言？」

「いいえ、単なる生活の知恵」

悪戯っぽく問う青年に、少女も茶化すように返します。

「はい、ココア」

少女が湯気を立てるマグカップを青年の前に置くと、

青年は一つ息を吐いて、椅子に腰をおろしました。

「あ、そうだそうだ」

と、青年は唐突に紙袋を引っ掻きまわすと、一つの小さな紙袋を取りだしました。

「これ、いつもの薬だけど、少し効き目を弱くしたから」

青年は自身で調合した薬を何包か取りだすと、少し心配そうに眉を寄せました。

少女も少し不安そうに眉を寄せて、

「どうして？」

と問います。

「いいかい、シャルロット」

青年は心配そうな顔のまま、少女を見つめて言いました。

「僕の作る薬もね、たくさん使うと体が慣れてしまうんだ。

そうすると、もっと強い薬が無いと効かなくなる。

その強い薬にも慣れてしまうと、もっともっと強い薬が必要になる
…。

強い薬になればなるほどね、副作用も強くなって、

それで体を壊してしまうようになるんだ」

青年は子どもに言い聞かせるようにゆっくり、優しく説きます。

少女はそれを黙って聞いていました。

青年は続けます。

「だから、少しずつ弱い薬にして、

ゆっくり、薬がいらなくなるように練習していくんだよ。

そうしたら、そのうち薬が無くなったって、ぐっすり眠れるようになる」

青年は不安そうな少女を宥めるように優しく微笑むと、

言葉を切って、目の前に置かれたマグカップに口を付けました。

少女は少し考えた後、小さく微笑んで、

「うん、わかったわ」

と頷きました。

青年も安心したように微笑み、

「うん、良い子だ」

と言うと、

「子ども扱いしないでよ」

と少女が少し口を尖らせました。

青年はその反応に笑い声を漏らし、

すっかり温まった身体で、落ち着いたように一つ息を吐きました。

(後) まほうつかいのせいねん

少女の予言は、夢によるものでした。

眠りの中で、時に鮮明に、時に暗示的に、少し先の事を知るのです。

それが良いことであっても、悪いことであっても、眠りの中で少女に与えられる負担は相当のものでした。その重苦しい夢から逃れるために、

少女は青年に、よく眠れる薬を貰っていたのです。

しかし、その薬を少しずつ弱くしたことで、

少女の夢には、また少しずつ先の出来事が現れてきました。

冬もだいぶ深まったある日、少女は夢を見ました。

一面、右も左も、上も下も、すべてが真っ白で、

何もない、何の音もしない空間に、少女は立っていました。

声をあげても、すぐに周囲の空間に吸い込まれて消えてしまいます。不安に駆られて走り出しても、

喉が裂けてしまいそうなほど息を切らし、

どれだけ走っても走っても走っても――、

何処まで行っても真っ白な空間は途切れず、

少女は苦しい息を吐き出しながらへたり込みました。

何もない、何も聞こえない。

これではまるで、世界が終わってしまったような――、
バツと少女は飛び起きました。

バクバクと暴れる心臓を押さえ、
少女はカラカラの口の中で無理矢理、唾を飲み込みました。

「…真っ白な夢？」

いつものようにやってきた青年に、少女は打ち明けました。
青年は少し軽く、

「冬だし、大雪の夢とかじゃないかな？」

と言いましたが、

少女が夢を詳細に語るにつれ、
だんだん真剣な表情になっていきました。

「……何もない夢か…」

考え込むように呟いた青年は、
夢を思い出して小さく震える少女に気付くと、
少女の頭を心配そうに優しく撫でました。

「…何度も、見たの？」

少女の顔を覗き込んで、青年は優しく問います。
少女は小さく頷きました。

そう、と青年は呟くと、少し心配そうに問いました。

「…薬、また強くしようか？」

少女はその問いに首を小さく横に振り、
小さな声で、続けました。

「…あのね、前に貰ってた、前の強い薬、余ってたから使ってみたの…。

でも、夢は見るの…。」

青年は少し眉を寄せた後に、

「シャルロット、余った薬は使っちゃだめだよ」

と忠告した後に、しょんぼりする少女の頭を撫でて言います。

「…そっか、薬、効かないか…」

「…うん…」

そして、少女の顔を覗き込んで優しく微笑んだ後、少し明るい声で問い掛けました。

「じゃあ、今日は僕が泊まってもいい？」

予想外の言葉にきょとん、とする少女に、青年は冗談っぽく続けます。

「ああ、別に変なことはいらないよ。ただ…そうだな、手を繋いで眠れば悪い夢を見ないっておまじないもあるしね」
少女はその言葉を聞いて、ひどく嬉しそうに微笑みました。

「ええ、メルクマール、お泊りしていいって」

青年も少女に合わせて、優しく微笑みました。

ゆらゆらと不安定に揺れるベッドサイドに置かれた蝋燭の灯が、青年の顔を照らしました。

「それじゃあ、僕はここにいるから。…おやすみ、シャルロット」

青年はベッドの枕元に置かれた椅子に腰かけて、ベッドの中の少女に微笑みました。

少女は肩口まですっぽり布団にもぐり、青年の手を握って小さく微笑みました。

「ええ、おやすみなさい、メルクマール。ありがとう」

「ああ、おやすみ」

手を優しく握りかえし、青年は愛おしげに少女を見つめて囁きました。

やがて、すうすうと小さな寝息を立て始めた少女に、

青年は安心したように息を吐きました。

少女は、真っ白な夢を何度も何度も見ました。
何の音もしない、何もない、そんな空間に何度も放り出されて、
はたして人間の精神が、耐えられるものでしょうか。

答えは、いいえ、です。

その日も、少女は真っ白な夢を見ました。
悲しいかな、無邪気なおまじない程度で
少女の夢の力は止められなかったのです。

耳の奥で静寂が鳴り、目の中まで真っ白になります。
いつものように、焦燥に駆られて駆け出した少女は、
取り憑かれたように繰り返しながら走り続けます。

「…助けて…、助けて…！…メルクマール…、助けて…っ」
その声も、足音も、みるみる白に染め上げられていきます。

「いや…もう嫌…っ…助けて…っ！」
少女の悲痛な声も、白の中に吞みこまれていきます。

青年は、不意にうなされ出した少女に気付き、
慌てて少女を覗き込みました。

「…っ、シャルロット、シャルロット…！」

青年は少女を揺さぶり、起こそうとしますが、
少女は苦しそうにうなされるばかりで、全く目を覚ましません。

「…シャルロット！」

青年が一際声を上げた時、少女の体から全ての力が抜けました。

「……シャルロット…？」

青年は恐る恐る少女の顔を覗き込みましたが、少女の真っ蒼な顔からは、一息の呼吸すら聞こえませんでした。

青年はその事実には気付いた時、大きく目を見開き、かたかたと震えだしました。

声にならないその吐息は細かく震えて

意味をなさないうめき声を誘発します。

すっかり冷たくなった少女の体を強く抱きしめて、青年はうずくまりました。

はたして、それからどれだけの時間が過ぎたのでしょうか。

明けの明星が遠くの空に薄く光り始めた頃、

青年は伏せていた顔をゆっくりと上げて、空を仰ぎました。

窓から見える紫紺の空は、まだ夜の夢の中に沈んでいるようです。

不安定に揺れる蠟燭が、青年と少女の影を壁に映し出して揺らしました。

青年は、その蠟燭の頼りない明かりの中で、

少女を優しくベッドへ横たえると、

手早くマフラーを巻いて、まだ雪深い森へ飛び出して行きました。

青年は早足で森を抜け、自分の家へたどり着くと、

地下の書庫へ飛び込みました。

青年は埃っぽいその部屋の最奥、いくつもの本棚を抜けた先、金庫の様な鉄の扉で封をされた小さな棚を開けます。

その中には、古臭いロープで雁字搦めにされた革装丁の本がありました。

青年はそのロープを半ば引きちぎるように取り去ると、

その中に書かれている文字を恐ろしい速さで読み始めました。

そして、しばらく後、読み終えた青年はその本を片手に、自宅の棚をひっくり返し、その中から色々を選び出しながら手近にあった袋に乱暴に詰め込みました。

道具を詰め込んだ袋を抱え、

しばらく使っていなかった媒介の杖を握りしめ、

青年は森の中の少女の家へ向かって駆け出しました。

青年が手にしていた本には、

禁術とされる強大な魔法がいくつか書かれていました。

かつて青年とその師は、それらを危険とみなし、

書庫の最奥に封じていたのですが、青年はそれを取り出しました。

その中でも青年が読み込んだのは、

「世界を終わらせてしまう魔法」

でした。

誰も使った事のないはずの魔法です。

ただ昔から、脈々と理論だけは継がれている魔法でした。

少女と青年、この二人の関係は、

傍から見れば、少女の方が青年に依存しているような形でしたが、本当は何より、青年が少女に依存していたのです。

だから、少女が居なくなってしまった今、

青年にとってこの世界は、

最早何の価値も無い、世界になってしまったのでした。

青年は、少女の家へ戻ってくると、

白い息を吐きながら、ベッドの上に眠る少女に微笑みかけました。

そのまま手早く、魔法の発動に必要なものを揃え、準備し、魔方阵を家の中に書き込むと、

少女の体を抱き上げ、魔方阵の真ん中に立ちました。

「…………シャルロット…」

そして最後に消え入りそうな声で、少女の名前を呼び、

青年は、杖を掲げました。

途端に青年の視界は白色の光に包まれ、

あっという間に、青年の目に映るものは真っ白な光だけになりました。

それは少女が夢に見ていた世界とすっかり同じものでしたが、青年がそれを知るはずありません。

青年はその中でもう一度、少女を抱きしめる腕に力を込めた後、ゆっくりと目を閉じました。

(おしまい) おしまいのまほう

青年が使ったのは、

「世界を終わらせてしまう魔法」でした。

それじゃあ、世界は本当に終わってしまったのかって？
そんなことがあるわけがないでしょう。

だって本当に世界が終わってしまったなら、
ほら、このお話すら存在しないでしょう？

でも、青年の魔法が失敗したわけではありません。

青年が使ったのは確かに、

「世界を終わらせてしまう魔法」だったのです。

そう、「彼の世界」を、終わらせてしまう魔法です。

世界だなんて言うと、なんだかとても大きくて、
大変なもののように思いますが、

世界なんてものはね、生きている人すべての中にあるんです。

だから、彼が終わらせたのは、彼の命という世界だけだったのです。

彼はもう、すべての人の世界が終わってしまったても構わない、
という心でその魔法を使ったのでしょうか、

結局の所、少女の住んでいた小屋を吹き飛ばしたくらいで、
その魔法はおしまいだったのです。

また朝日が昇って、街の人たちは何でもないように

目をさまして、何でもないようにまた一日を始めました。

そんな一日がたくさんたくさん降り積もって、

やがて、みんな、白銀色の予言者と、栗色の魔法使いのことなんて、さっぱり忘れてしまったのでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1194p/>

はくぎんのよげんしゃとしゅうえんのまほうつかい

2010年11月24日23時08分発行